

ジャワ島における鄭和

— 海域学の視点で見る中国・インドネシア

立教大学文学部教授 上田 信



鄭和との出会い

2004年から翌05年にかけて、中国雲南省の昆明に研究で1年間、滞在しました。その時に出会ったのが、今日の話の主題の鄭和でした。鄭和は中国の船団を率いて航海をした人物として知られていますが、生まれは雲南省。昆明から南に少し行ったところが出身地で、そこには鄭和のお父さんのお墓があります。その墓碑、石碑に刻まれたものを見まして、それが不思議な墓碑だったということで、鄭和に関心を持ちました。

2005年はタイミングよく、鄭和が第1回目の南海遠征に出た年から600周年にあたり、中国各地で鄭和の業績を

記念する様々なイベントがありました。そんなことから鄭和に関心を持ち、『海と帝国』（講談社）という本に、鄭和を主人公とする1章を書きました。

今、歴史学全般が、海に非常に注目しています。ここ数年の話ではなく、10年ぐらい前から海への関心が強くなりました。それは海が人の動きを妨げるものではなくて、人の動きをつないでいく側面が非常に大きいということが指摘されて、海の歴史であるとか、環東シナ海、環日本海、つまり東シナ海を取り囲む国々、あるいは日本海を取り囲む国々、の研究が非常に多く出版されています。

立教大学を一昨年退職して、今、名誉教授であられる、荒野泰典という日本近世史の研究者がいます。荒野氏は日本の

江戸時代は決して鎖国ではない、国を開ざしていたのではない、という説を唱えました。鎖国ではなく、「海禁」つまり管理貿易体制であったのであって、幕府が管理する形で対外貿易は行っていた、そして、4つの「口」を通じて、アジア、世界とつながっていたというのです。

4つの口、どこだか分かりますか？

長崎はすぐ思いつくと思います。2番目は対馬です。朝鮮半島の朝鮮王朝に通じて中国につながっていましたし、3番目は沖縄です。薩摩が沖縄、当時の琉球王国を支配していましたが、琉球はまた清朝にも朝貢して、「日清両属」でしたから、日本は薩摩を通じて、沖縄を経由して中国とつながっていたことになります。もう1つは、なかなか思いつかないと

思いますが、北海道の松前藩がアイヌを通じて、大陸のアムール川流域と交易路を持っていたことが指摘されています。アムール川流域に出先機関があった清朝と交易を行っていたとされています。

4つの交易の口があったことを指摘した荒野氏がその研究者人生をかけて挑戦したのが、日本の教科書から「鎖国」という言葉を消すことでした。いま使われている高校の教科書を見ますと、「鎖国」という言葉は使われていますが、「いわゆる鎖国」とか、カッコつきで「鎖国」という形で登場し、以前のように「日本は江戸時代鎖国をしていた」という言い切り型ではなくなってきました。

海域学の成立

荒野氏が海の視点からアジアの日本を見る研究をされた経緯もあり、立教大学では「海」を研究しようということで、去年から「21世紀海域学の創生」というプロジェクト、「海域学」を1つの学問として成り立たせようというプロジェクトがスタートしました。

この「21世紀海域学の創生」について紹介をさせていただきます。対象としている広がりには、まず東シナ海と南シナ海、

さらにその先にはインド洋が広がっています。またかつて日本が第1次世界大戦後に、ドイツから管理を引き継いで委任統治という形で、パラオ（現ペラウ）など、この辺りの島々を「南洋」という形で統治をしていたという歴史があったことも含めて、この大きな範囲、インド洋の東側から南洋、そしてシナ海域までを、1つの海域ととらえて研究していこうと考えています。

プロジェクトを始めたきっかけとしては、立教大学のアジア地域研究所に、1940年代に日本の軍部が作った「外邦図」がある、という事情もあります。当時、日本国内の「内邦図」に対して、それ以外の日本の直接統治からはずれた地域を「外邦」と呼んでいた、その地図です。

「外邦」は具体的にはアジア太平洋戦争の始まりのころに、日本軍が南に進出する中で獲得したオランダが持っていたインドネシアや、イギリスの支配下にあったシンガポール、ペナンなどマレー半島、さらにフランスのインドシナなどです。

こうしたところで植民地の地図をいち早く接収して、それをベースにして接収した地図の地名をカタカナや漢字に置き換えて、日本人が見てもすぐ分かるように編集し直したのです。

それもだんだん後になりますと、原版は24色刷りという非常にきれいなものなのですが、そこまできれいに作る余力がなくなり、3色刷りという質素な形で単にリプリントをして、たとえばフランス語などの原版の地名がそのまま残っているといったものもあります。

この外邦図は戦後の1950年代にGHQによって処分されそうになった時に、かつて関わっていた人たちがこれは貴重な資料であると頑張って、大学とか、研究機関に分配されることになりました。

当時、たまたま立教大学に別枝さんという東南アジアの研究者としては草分けに近い方がおられて、地理を教えていました。別枝さんは軍が南に進出した1940年代にいち早く現地に行きまして、どういう建物を保存して、どこをきちんと管理しなければいけないといったことをアドバイスする役割を果たしたと伺っていますが、その関係から、主に東南アジア関係の外邦図が、約4千枚近く立教大学に寄贈されたのです。

1990年代に大阪大学の小林茂教授（現在は名誉教授）が、外邦図の総合的な研究を進め、数年前に『外邦図』という中公新書を書いています。小林氏が代表として文科省から科学研究費を獲得し、

立教大学以外の研究機関にある外邦図については、整理を進めていたのですが、立教大学には当時それに対応できる人がいなかったということもありまして、研究あるいは整理が全く行われずにおりました。そのために非常に劣悪な状況の中で、木箱に入れて保存していたわけですが、これを何とかしなければいけないということで、この度、文科省からも資金を得まして、整理をするという形をとりました。

そこで、外邦図を整理するだけではおもしろくない、これをベースにして「海域学」をつくっていかうとなりました。

東南アジア関係ですので、海に関する、あるいは港町の地図がわりと多い。その1940年代の状況、近代化が進む前の原風景を外邦図に残しているわけですから、それを1つのプラットフォーム、あるいは1つのつなぎ目にして、現代はどうなっているのだろうかという形で、現在の地理的な変化、あるいは様々な動きを、外邦図と結び合わせることによって、何かおもしろいことができるのではないかと研究を進めているというのが現在の状況です。

このプロジェクトは4つのチームに分かれて研究をしています。

1つは歴史学チーム。歴史から見る。私も専門は歴史ですので、非常に興味を持っているところですが、16世紀から19世紀にいたる欧文の東南アジア関係の書籍のコレクションのマイクロフィルムなどを購入しまして、そこに書かれている様々な情報を地理情報として位置付けていく形で、外邦図と関連づけています。今年度は、オランダの植民地統治時代に作られた様々な図版がありますので、それを購入して、きれいな図版が多いと思うのですが、それを外邦図と結びつけて、それが今どういうふうに変化しているのか、景観が変わっているのかということを見たいこうというのが、歴史チームです。

もう1つは政治学チーム。東京大学の竹中千春氏という女性の研究者を中心として、インド洋から見ようとしています。ご存知のように、中国の海洋強国としての進出が大きな話題になっており、それにインドが対抗するという動きがあるわけですが、それがインド洋にそれぞれが拠点とする港を造ろうとするという形で現れています。インドと中国、あるいはスリランカという国々との確執、そういういったものも見えてくるのではないかと立たせるのが目的ではなくて、どのよう

にして海に共存していくのか、を見極めていきたいというのが、政治学チームの基本的なスタンスです。

もう1つが文化班。文化学という形で、文化人類学などの視点から、文化の多様性を見ていこうと研究を進めています。

もう1つの最後の柱は観光という側面です。立教大学は日本で最初に観光学と銘打った学科がつけられたところで、最初に観光学部ができたということで、観光学には非常に歴史があるところです。この観光学という視点からいきますと、たとえばホテルのネットワークはどのように形成されたのか、あるいは海のリゾートというものがあるわけですが、元々東南アジアに住んでいる人にとっては、海は怖いものであって、とても遊ぶような所ではなかったわけです。それがある時からリゾート施設という形で、海で遊ぶということが外から入ってくるわけですが、それがどういう形で入ってきたのか、ということを見ていこうとしています。

鄭和の航海

さて本題の鄭和です。鄭和は、海洋強国を目指している中国にとっても、重要なキーパーソンとして脚光を浴びていま



写真1 鄭和記念公園の鄭和像

す。7月11日は中国で「航海の日」という記念日になりました。これは鄭和が第1回の遠征に出帆した日とされています。ちなみに日本には7月20日、今は第三月曜になっていますが、「海の日」というのがあります。これは昭和16（1941）年に制定された「海の記念日」がもたなくなっていますが、明治9（1876）年に明治天皇が東北巡航の帰途、軍艦でなく汽船「明治丸」で横浜港に着いたの

が、7月20日だったのです。やはり日本もその当時、海洋強国というか、南洋に進出するというか、そういう時代背景のもとで1941年に制定されたとすれば、中国の航海の日と、日本の海の日が並び立っているのは象徴的なことだと思っています。

ところで、鄭和という人物が、本当に

中国が言う海洋強国のシンボルになりうるのだろうかと考えますと、私は違うのではないかなと思っています。鄭和が生まれたところは中国・雲南の昆陽、昆明から車で1時間くらいのところですよ。滇池という大きな湖を臨む場所です。鄭和の生地にある丘の上に鄭和記念公園というのが造られていて、そこに巨大な鄭和石像（写真1）が建てられています。その前に広がって海のように見えるのが滇池です。水深は非常に浅いのですが、古くからここで帆船を使って物資を輸送したり、魚を捕ったりということが行われ



写真2 鄭和の父の墓

てきました。今は非常に汚染が進んでいます。そこに鄭和の記念公園があるわけです。

記念公園の中には鄭和の父親の墓（写真2）があります。漢民族の墓とはかなり趣が違いうムスリム（イスラム教徒）の墓です。墓碑があります。高さ1・7メートル近いものなのですが、読めば読むほど、不思議な謎の多い碑文です。

碑文の冒頭を読むと、鄭和のお父さんは、「一字はハッジ、姓は馬氏、代々雲南の昆陽の人であった」と始まります。

ハッジとは何か。イスラムの信者がメッカに巡礼することは皆さんご存知だと思いますが、メッカに巡礼する巡礼月というのがあります。その月にメッカに行くと、一切世俗の物を捨て去って、民族などを超えた形で全員が白い同じ服を着て、決まったルートを礼拝する、こういう礼拝を成し遂げた人をハッジと呼びます。ですから鄭和のお父さんは、メッカ巡礼をしたことのある、敬虔なムスリムだっ

たということがこの一節から分かります。ところが奇妙なことに、お父さんの墓碑なのに、お父さんの本名が書いてありません。これは非常に不思議なことです。そして、鄭和のお父さんのお父さん、鄭和からするとお祖父さんもハッジであったことが後の方に書かれています。つまり2代にわたって雲南からメッカに巡礼に行ったことになります。メッカ巡礼は、単独ではなくて、親族あるいは地域の仲間と連れ立って出かけていくものですから、おそらく鄭和の父親と祖父は一緒にメッカに行ったと考えると、間違いはないと思います。

鄭和は少年時代を父親や祖父と一緒に雲南で暮らしていました。ところが1380年に明朝の大軍が雲南を攻略したとき、その混乱のなかで鄭和の父は死去しました。おそらく、侵略軍である明軍に抵抗したものと考えられます。それ故に、碑文には父の名が刻まれなかったのでしょう。この戦乱のなかで鄭和は明軍に捉えられて去勢され、のちに永楽帝となる朱棣に献上されて宦官となりました。彼はのちに朱棣が第2代皇帝に対するクーデターを起こしたときに活躍し、「鄭」という姓はじつはその功績によって与えられたのです。

この碑文の最後には「永楽三年端陽、つまり1405年の旧暦五月五日と刻まれています。この年の7月11日、明の第3代皇帝、永楽帝の命によって、鄭和は第1回の航海に出帆しました。船団の旗艦は「宝船」と呼ばれ、その長さは137呎とされています。当時、世界で最大の船であったことは間違いありません。コロンブスがアメリカに渡った時の船の5倍くらいの長さがあったと言われています。

造船の専門家によれば、当時の技術でこれだけ巨大な木造船を造ることは無理だったのではないかとありますが、本当のところは分かりません。永楽帝はとにかく巨大なことをするのが大好きな皇帝だったので、造った可能性はあるかもしれません。しかし、いずれにしても世界最大の船を造って乗り出していったということは間違いありません。

さて、鄭和の遠征は7回にわたって行われました(表1)。第1回目〜3回目と、第4回目〜6回目で、多少性格が違います。第7回目は、実は永楽帝が死んだ後、永楽帝の孫の皇帝の下で行われた航海ですので、別枠としましょう。

1回目〜3回目と、4回目〜6回目との違いは、航海から帰ってから次の航海

表1 鄭和艦隊の7回の航海

●第1回	1405年 ~ 1407年
●第2回	1407年 ~ 1409年
●第3回	1409年 ~ 1411年
.....	
●第4回	1413年 ~ 1415年
●第5回	1417年 ~ 1419年
●第6回	1421年 ~ 1422年
.....	
●第7回	1432年 ~ 1434年

に出かけていくまでの期間の長さです。前半の3回は、帰港したその年のうちに、半年くらいの準備期間を経て次の航海に出帆しています。モンスーンの風向きが変わったらすぐ出かけていくという形だったのです。

4回目以降は、次の航海までに2年間かかっています。準備期間が長いのです。こういう形で1回目から3回目と4回目以降は、性格が違うということになります。

目的地を見ますと、1回目から3回目はインドのカリカットです。4回目以降は、7回目も含めてですが、さらに遠いアラビアのホルムズを1つの目的地として、ここを拠点としてメッカや、アフリ

カの東海岸に分遣隊を派遣しています。メッカには鄭和自身は行っていないようですが、部下は行ったようです。

鄭和は宦官でしたから、子どもはいないのですが、アフリカのモザンビークには、鄭和が連れていった兵士たちの居残り組がいて、その子孫がつくった村というのがあります。現在では村人は東アジア的な風貌ではないのですが、彼らの祖先は鄭和と共にやってきた船乗りであったという伝承があります。中国は鄭和とつながりのある村ということで、若者に奨学金を出して中国に留学させたりしているようです。

つまり前半と後半で大きく変わるのは、舞台がインド洋西部に移る第4回目以降では、アラブの商人やインドのイスラムの人たちが、主に交易を担っているということです。それも含めて、この4回目を以降の鄭和の遠征には、その船に非常に多くのムスリム、イスラムの信者が参加したと言われています。

では、鄭和の航海の目的はそもそも何なのか、これについては歴史研究者が様々な説を唱えています。中国の正史（王朝の公式の歴史）である『明史』によれば、永楽帝は自分の甥にあたる人物が2代目の皇帝だったのに対してクーデターを起

こし、南京にいた2代目皇帝を追いつ落として自分自身が3代目の皇帝になりました。しかし、攻め落とした南京の宮殿の焼け跡からは第2代皇帝と確認できる死体が発見されず、密かに南洋のほうに逃れたという噂があったために、この第2代皇帝を捜しだすために鄭和を遠征させたということが、正史の明史に書かれています。本当にそうなのでしょうか。

航海の真の目的

私自身の説はこうです。1403年におそらくメッカ巡礼から帰ってきたムスリムが南京に到着します。彼らはインド洋から南シナ海に直接船で来ることができず、そのために非常に長い間、タイのアユタヤで足止めになっていたという情報を明朝にもたらします。それはおそらく鄭和のお父さんたちが使ったルートだろうと思います。

中国からメッカへの巡礼と言いますと、陸路のシルクロードを思いがちですが、雲南省の立地を考えますと、わざわざ北上して内陸に行くよりも、何らかのルートで海に出て、船でメッカに行ったほうが、早かったと考えられます。海に出るにはいくつかのルートがあり、1つは雲

南から今のミャンマーを経てベンガル湾に出るルート、もう1つは雲南から東へ行って、今の福建省に出て、そこから船に乗るルートです。福建からインド洋を経てアラビア方面に行くというのは、じつは元の時代、マルコポーロが自国に帰るときにたどったルートです。おそらくその頃は海を通して、メッカ方面に行くというルートが盛んに使われており、14世紀の海上交易について記す『島夷誌略』には、雲南から1年ほどでメッカに着くことができる」と書かれています。

ところが1403年ごろに、どうもマラッカ海峡が通れなくなった。その結果、海を渡ってきた人たちは、ベンガル湾から陸に上がり、山を越えて、タイの今のバンコクよりちょっと北にあるアユタヤに出て、そこで足止めをくらっていた。そして南京から明朝の使節がやって来たときに、その船に便乗しようやく南京にたどり着くことができたということだったと思われる。

これから先は想像なのですが、この情報を得た時に、ムスリムの家で育った鄭和は「何とかしなくてはいけない、中国にいるムスリムたちが、安心してメッカに巡礼できるようにする必要がある」と考えたのではないか。そして鄭和は自分

の主人である永楽帝を説得したのだと思います。永楽帝は非常な野心家でしたので、その野心を煽るような形で、今、海に出ることによって、「陛下の威光が海の世界にも轟きます」と言ったのではないのでしょうか。鄭和が焚きつけて、南海遠征プロジェクトを皇帝から命令させる、というように事を運んだのではないかと想像しています。

当時、ジャワ島にあったマジャパイト王国が衰退し、東王宮と西王宮に別れ内戦になっていました。こうした政治状況のなかで、西王宮勢力を後ろ盾にして、華人の陳祖義を代表者とする勢力がマラッカ海峡の航行権を握り、服属しない船舶の航行を妨害していたのです。陳祖義は海賊であったと中国側史料にはありますが、単純な海賊というよりは、東南アジアにおける一個の政治勢力であったわけです。

こうした政治状況に介入し、メッカ巡礼の船舶が自由に往来できるようにするために、鄭和は航行権をムスリムの華人に管理させようとしたものと思われます。実際に、鄭和は第1回目の航海のときに、マラッカに遠征の基地を置いて、ムスリムを乗せた船が海峡を安全に航行できる状況をつくりあげています。



写真3 三官大帝廟前の宝船モニュメント

私は先週の3月22日まで、ジャワ島に行ってきました。このテーマの足跡をたどるといって見えてきたわけです。行ったところはスマランとスラバヤという2か所です。今日のテーマに関する様々な動きがあるように感じました。スマランにある三官大帝（天官・地官・人官）を祭る廟という所には、2008年頃に鄭和の像が廟の前につくられました。またコンクリート製ですが、宝船のミニチュメント（写真3）もつくられていました。

廟の中には、「三保大人」像が置かれています。鄭和の別名は「三保」というのですが、なぜ三保なのかについては諸説あります。あるイスラムの研究者の説ですと、「シャーパーン」というムスリムの間では比較的よくある名前を漢字で表したのが三保ではないかというのです。ちなみにシャーパーンというのは、イスラム暦の第八の月に由来する名前です。イスラム世界ではこの月に生まれた人はシャーパーンという名前を名乗ることが多いので、鄭和もおそらくそのころに生まれたのではないかと、その研究者は推定しています。

廟内に掲げられた行事日程表によると、旧暦六月廿九日と三十日には「三保大人進港」と書かれていまして、スマランに鄭和が来港したとされる記念日です。この時には御神輿をかついで、海まで練り歩くと、廟の管理人が言っていました。十一月廿九日と三十日は三保大人の誕生日を祝う行事があると記されていました。この日付に根拠があるのかどうか、歴史的には跡付けられません。三官大帝廟の隣にある建物のなかには、華僑の祖先たちの位牌がズラリと並んでいて、伝統的な中国の祖先崇拜と、鄭和への信仰が並び立っていました。

もう1つスマランで訪ねたのが三保洞（現地の言葉ではサンポコン）と呼ばれる処です。今世紀に入ってから、中国風の巨大な建物に改められています（写真4）。このように、中国的なものが、このところ急にインドネシア、ジャワ島で目立ち始めたのです。

海域と国家

インドネシアにおける華人は非常に厳



写真4 スマラン三保洞

しい歴史を持っています。スハルト時代の抑圧も含めていろいろありましたから、1990年代までは華人がこういう大きな動きを表に出すのは非常に難しかったと思います。今世紀に入ってから、華人の宗教的な活動を、インドネシアの政府が公認していることがはっきりと見えてきます。

「多様性の中の統一」という言葉が、インドネシアの国是になっています。いくつかの宗教を公認して多様性を認めた上で、しかし真理は1つであるというのが、インドネシアの国是であるわけですが、儒教も数年前に公認宗教に入っていると聞いています。

こうした動きのなかで、華人系の住民の動きが非常に目立っているわけですが、同時に華人のほうでもそれが中国と政治的にダイレクトに結びつくことにはならないように、バランスを取りながら、華人らしさを出しているのではないかと思います。この点をこれから具体的に明らかにしていきたいと思っています。

本堂の下には洞窟がありまして、きれいに整備されていますが、かつては海辺で、その洞窟の奥に泉が湧いていた。そして鄭和の艦隊が着いたときに、病気の

人に洞窟の水を飲ませたところ、病が一気に治ったということが伝えられている。いまは鄭和の像を祭っている足下のところに蓋がしてありますが、ここに井戸があつて（写真5）、ここに水がこんこんと湧いている、と言われています。

中国的な大きなお堂が建つ前は、地元の人たちの信仰の場でもあつたそうで、かつてはこの洞窟は、アッラーから言葉を介さずに啓示を直接受けるといったイスラムの神秘主義の信者たちが、この洞窟に籠って瞑想する場でもあつた



写真5 洞内の三保大人像と井戸

ようです。そこに現在は中国風の建物が建ったということです。

東部ジャワのスラバヤは、大きな港町で、現在、インドネシアではジャカルタに次ぐ2番目に大きな町です。ここにも鄭和を祀る廟がありました(写真6)。

ここには10畝くらいもある長い木材が置かれていまして、この伝えによりますと、鄭和の船を造っていた木材だと言われています。本当に600年前の木材かどうかは分かりませんが、海から引き



写真6 鄭和を祭る廟

揚げられた木材だということで、鄭和に関連づけられて飾られています。

お堂の周辺は全部ムスリムのお墓になっています。本来はムスリムのお墓の中に、ぼつんとこういう形で、中国があつたのでしょうか。

もう1つ、今回の旅行で興味深かったのですが、鄭和を記念するモスク(写真7)でした。もともとこの地にあったモスクを、中国風の建物に再建するプロジェクトは、2001年に始まり、2003年に完成しました。



写真7 鄭和記念モスク

「鄭和清真寺」という扁額(写真8)が掛けられていました。清真寺とは、中国語でモスクのことですが、その下に「MASJID MUHAMMAD CHENG HOO」とあります。CHENG HOOとは、鄭和です。ムハンマドとありますが、なぜムハンマドなのか。鄭和の父親の姓は馬であるといいましたが、馬という姓の多くはムスリムです。そして馬というのはムハンマドのムという音に基づくと言われています。

本堂の脇にはレリーフがあり、ジャワ



写真8 モスクの扁額

風ムスリムの鄭和像が描かれています。中国などで、様々な鄭和に関する肖像画、あるいは彫像は2005年以降、非常に増えています。そのほとんどがいわゆる中国風、いわゆる中国の宦官として描かれていたのに対して、ここで初めていわゆるムスリムとしての鄭和のイメージを見ることができました。

ジャワを旅していろいろ感じるところがありました。インドネシアにおいてスハルトが失脚した後、様々な政治的な混乱があったことはご存知だと思います。4月に総選挙があり、私が訪問した時期は選挙期間中でしたが、お祭り騒ぎではあったけれど、タイのような政治混乱に直結するという雰囲気ではありませんでした。

そういうインドネシアの安定した状況の中でも、やはり中国との距離感をどう取るのか、かつてのように対立するのでは、あの巨大な中国には対抗できないし、かといって、完全にすり寄っていくのも危ないのではないかというような微妙なバランス感覚で、インドネシアは中国を見ている、ということを感じることができました。

たとえばこの鄭和を記念するモスクですが、つくったのは華人系のハッジとい

う名前のひととされています。2001年に、元々ここはモスクだったものを中国風に変えて、鄭和の航海600周年記念に間に合うように、建てられました。この時に財団がつくられました。それは「インドネシア・イスラム・中華・統一」というモットーを掲げています。

さらに「非政治、独立、社会刷新」という3つの行動指針が立てられています。その「非政治」の説明では、「我々に様々な働きかけがあるかもしれないが、それに対しては常に中立の立場を保つべきだ」と書かれています。インドネシアと中国という巨大な国家権力の狭間で、インドネシアに住んでいる中国系の華人ムスリムたちが、政治的な思惑に左右されないで、自分たちはバランスを取りながら、中立、非政治を維持していかなければいけないのだという立場がそこから読み取れると思います。

インドネシアと中国の関係は海域の世界では、あまり今まで注目されていなかったのですが、わりと重要なことかもしれないと、今回の旅のなかで考えるようになりまし。南シナ海においては、中国とベトナム、フィリピンの間では南沙諸島をめぐって対立がありますが、中国とインドネシアは直接領土紛争という形で

対立してはいません。インドネシアもASEAN諸国のなかにおいてフィリピンやベトナムとは違うスタンスで、中国との距離感を量ろうとしているのかもしれない、こうした状況の下で華人の立場も微妙に動いているものと考えられます。

こうした動きを象徴的に表している事象が、今回の旅のなかで散見した多様な鄭和のイメージということになります。それらのイメージとは、600年前に海域の政治状況を大きく変えた鄭和、東南アジアでイスラムが広がる契機をつくった鄭和であり、現在の中国が「海洋強国」のシンボルに祭り上げようとしている鄭和です。1つに結ばない鄭和の多様なイメージから何を読み取るか、今後の課題としていきたいと考えています。

(3月28日・アジア研究懇話会)

講師略歴(うへだ まこと)

1957年 東京都生まれ

1982年 東京大学大学院人文科学

研究科修士課程修了

東洋文庫を経て

現在 立教大学文学部教

授

著書 『海と帝国』『シナ海域 蜃気楼

王国の興亡』『森と緑の中国史』など